GAKKAN GAKUFU 45

Interview

学環第二フェーズに向けて

佐倉 統 新学環長

2015 年４月、佐倉教授が学環長に就任しました。インタビューでは、学環のこれからに向けての意気込みや、ご自身の研究について語っていただきました。

■学環のこれまで・いま・これからについて

学環が2000年に出来てからもう15年が経ちました。いままでずっとできたばかりだから、新しいからと言って前ばかり向いてきたんですが、やはり１５年はそれなりの年数で、卒業生も多くなりましたし定年退官された先生方もいます。この１５年でやってきたことを総括して、どこがよかったのか、どこがわるかったのかを振り返り次につなげる時期なのかなと思います。そういう意味では学環の第二期、第二フェーズに移っていくところだととらえています。

いままで学際、文理越境という旗印でやってきて、その基本はかわらないのですが、これからは大きく二つの柱が必要だと思っています。まず国際化です。これは学環だけではなく日本の大学すべての課題かもしれません。もちろん個々の教員の方々は国際的に活動していますが、組織として、あるいはカリキュラムとしてどういうポリシーでやるのかということですね。国際化といっても単に英語で授業をしたり海外の教員を招聘したりということだけではなく、国際社会のなかできちんと自分の立ち位置を知って発言や行動ができる学生を育てることが大事だと思います。そのためには自分は何者かということを客観的に知らないといけないし、今の国際社会がどういう情勢になっているかを見る力も必要になります。そういうことを学び、研究活動を国際化していくにはどういうカリキュラムやプログラムが必要なのか、をきちんとしていきたいと考えています。

もうひとつは、個々の先生方のパフォーマンスは高いと思うので、学環という組織として、どういうふうに外から見えるのか、いわば看板を掲げることも必要だと思っています。個々の先生がやっている研究とはもちろん矛盾することではなくて、もう一段メタなレベルで何をするか。たとえば情報倫理の問題やシンギュラリティの問題など、社会的にも注目されている課題があります。情報技術と社会との関係が話題になっていて、興味も不安もあるし、あるいは次の産業の種もあるかもしれません。こういうことに取り組むのはまさに学際的なアプローチが必要で、学環は展望を示したり、実験したり、ということができる貴重な組織だと思うのですよ。これから１０年後２０年後の情報機械文明のありかたをさぐるということを学環の旗印にできたらいいと思います。

■学環長の役割は

そういったなかでの学環長の役割ですが、それぞれの先生方のパフォーマンスは相当なものがあるので、学際的なシナジーを高めること、学環としてのアカデミックアイデンティティを確立することだと思っています。シンギュラリティやセキュリティなどのテーマでシンポジウムなども開催してみたいですね。

■ご自身の研究について

科学技術社会論(science, technology and society; STS)を専門として研究しています。専門化した科学技術が進んでしまったときに、一般社会とのすりあわせをどうするのか、という問題意識を持っています。もともとは動物生態学でサルの研究をしていました。その分野だと、人間もサルも動物だし遺伝子的にも近いので、サルの行動から人間の行動を議論するというのは割りと当たり前だと思っていたんですね。ところが、少なくとも２０～３０年ぐらい前だと社会学や文化人類学の人はそういう考えをとても批判するのですよ。ダーウィンといった瞬間に、生物学的決定論や遺伝的決定論はいけないとか。これはひとつにはヒトラーの人種差別政策に進化論や遺伝学が利用されていたことへの反省があったわけですが、そのあたりから、科学知識と社会文化との折り合いをどうするのか、というのは相当に重要な問題だと思い、そこに次第に興味が移ってきました。さきほどのシンギュラリティや情報倫理の問題などもまさに関連してくると思います。

■学生へのアドバイス

情報学環に来る学生さんはバックグラウンドが多彩なのが素晴らしいですが、一方で専門を深めるというところでまだ足りないところがあるかもしれない。この二つを両立させるようになってほしいですね。特に、全体の中で自分の研究がどこに位置づけられるのか。修論などで先行研究との比較をちゃんとしろと指導されるのも、そこが大事だからですね。専門領域のなかで、あるいは科学全体、社会とのつながりのなかで自分の研究がどういう立ち位置にあるかを明確にしてほしいということです。そういう俯瞰的な、メタな視点をもってもらいたいと思いますので、それぞれの研究室で専門を深めると同時に、ぜひ他の領域の学生さんや先生とも積極的に交流してください。

■ご自身の趣味など

クラシック音楽が好きで、学生時代はオーケストラでフルートを吹いてたんですよ。最近は演奏する時間はなかなかとれなくて聴く専門になっています。ストラヴィンスキー、ラヴェル、シベリウスあたりが好きですね。あとはイギリスの作曲家でディーリアスもよく聞きます。

濱田前総長記念講演

2009年より東大総長を務めてこられた濱田純一教授が3月末をもってご退職された。これに先立ち、3月6日に『自由と制度』と題した記念講演がダイワユビキタス学術研究館石橋信夫記念ホールにて行われた。講演では、ご研究の出発点となる「制度的自由」という概念について、プレスの自由と基本権という2つの文脈の下で解説された上で、総長としての経験や楽しい秘蔵映像を盛り込みながら、自由と制度のダイナミズムをめぐる諸相を鮮やかに論じられた。ごく内輪だけの会をご希望だったが、司会の植田教授のサプライズにより地元兵庫県明石市から4名の幼馴染をお招きし、一緒にご退職を祝った。講演会後の懇親会では、坂村教授のご尽力により懐石の名店『くろぎ』のケータリングで舌鼓を打った。懇親会後は濱田先生自ら玄関に立たれ、皆様にサイン入りのご著書をお配りになるなど、お人柄が伝わる場面もあり、和やかに会は終了した。(教授・山口いつ子)

第 1 回 ITASIA 国際交流会

2015 年 4 月 17 日（金）、第 1 回 ITASIA 国際交流会が開催された。ITASIA をはじめ、文化・人間情報学コース、社会情報学コース、先端表現情報コース、それから公共政策大学院から合計 7 ヶ国の 35 人が参加し、とても国際色豊かな集まりとなった。英語と日本語はもちろん、時には中国語と韓国語が飛び交う会場では、初対面とは思えないぐらい、参加者はすぐ意気投合し、国籍、所属コース、年齢などを問わず、和気あいあいとした雰囲気の中、楽しいひと時を過ごした。(ITASIA・デニス・チア・ム・カイ)

大川賞記念コンピュータビジョンシンポジウム開催

3 月 5 日（木）、伊藤謝恩ホールにおいて、池内克史教授および Olivier Faugeras 教授（INRIA）の大川賞受賞を記念してシンポジウムが開催された。両教授は長年にわたってコンピュータビジョン分野において多大な功績をおさめられ、その情報通信分野に対する貢献が認められて今回の受賞となった。このシンポジウムでは、同じくコンピュータビジョン分野の第一線で活躍されている佐藤洋一教授、西野恒准教授（Drexel University）、Shree K. Nayer 教授（Columbia University）、Harry Shum 博士（Microsoft）からそれぞれ最新の研究についての講演があった。その後、坂内正夫名誉教授から大川賞について、金出武雄教授（Carnegie Mellon University: CMU）からは CMU 在籍時代のエピソードを交えて受賞者二人の功績が紹介された。

受賞記念講演では、Faugeras 教授から「Computer Vision and Computational Neuroscience」という題目でカメラ校正から脳科学への展開までこれまでの業績を振り返る講演を頂いた。池内教授からは「From Shape from Shading to e-Heritage」という題目で明るさ解析による 3 次元復元からサイバー考古学まで、その研究の変遷を交えて講演を頂いた。池内教授の講演は本学における最終講義でもあり、ホールが満席となり立ち見が出るほど盛況であった。

シンポジウム終了後は山上会館において懇親会が開催され、参加者には思い出を語るとともにお二人の受賞を祝福する機会となった。今後も研究活動を続けられる池内教授、Faugeras 教授の益々のご活躍をお祈りして、本稿の結びとしたい。
（准教授・大石岳史）

Congratulations !!

学際情報学府学位授与式

3月24日、安田講堂にて大学全体の学位授与式が挙行された。午後より、福武ラーニングシアターにて学際情報学府の学位授与式を行われた。修士過程修了者７４名、博士過程７名（年度内修了者６名を含む）に須藤学府長より学位が授与され、学府長と石崎専攻長から祝辞が送られた。

優秀修士論文発表会

学位授与式に引き続き、福武ラーニングシアターにて優秀修士論文発表会が開催され、学府長賞１名、専攻長賞１２名が表彰された。専攻長賞を受賞した安藤元博（社会情報学コース）、金盛友哉（文化・人間情報学コース）、原田篤（先端表現情報学コース）、高橋大介（総合分析情報学コース）、と、学府長賞に輝いたSALUVEER Sten Kristian（アジア情報社会コース）の５名がそれぞれ受賞論文について発表を行った。

総長賞受賞

修了者の角野為耶さん（指導教員・中川先生）が、ダブルダッチ競技の世界選手権大会におけるパフォーマンス部門優勝及び総合準優勝受賞が評価され、団体として総長賞を受賞した。

情報学環教育部修了式

2015年3月19日（木）、情報学環ダイワユビキタス学術研究館石橋記念ホールにおいて、情報学環教育部の修了式が開催された。情報学環教育部は、情報・メディア・コミュニケーションについて専門的に学ぶことができる学部レベルの2年間の教育プログラムである。教職員や現役の研究生が祝福するなか、17名の修了生に対し学環長より修了証が手渡され、晴れやかな修了式となった。

地方の元気 シンポジウム

2014年10月30日、情報学環ダイワユビキタス学術研究館において、「地方の元気　シンポジウム」が開催され、最新の情報通信技術を活用した新しい地方行政モデルについて、情報学環の坂村健教授、作家の髙村薫氏、青森県知事の三村申吾氏によるディスカッションが行われた。近年のオープンデータに向けた世界的な動きの中で、gov2.0というオープンな行政モデルは日本でも注目を集めている。坂村教授は、オープン行政の実現に向けた課題として、ベストエフォートの受容やデ摘し、その観点を地方行政にも適用することが、「地方の元気」につながるという視点を示した。それに対し、三村知事は青森県における情報通信技術の様々な活用事例を紹介した上置いた共助社会のツールとしてのオープンデータ政策という問題提起を行った。また髙村氏は、情報通信技術が人間の能力を超えていく可能性に対する懸念と、都市と地方の本質的な格差としての「華やかさ」を指摘した。これらの問題提起を軸に、これからの地方行政について、活発な議論が行われた。(特任講師・別所正博)

冬期入試合格発表

2月17日、平成27年度修士課程・博士課程入試（冬季募集・平成 27 年 4 月入学）の合格者発表があった。修士課程の志願者数は 20 名、博士課程の志願者数は 45 名であった。冬季入試の最終合格者数は下表のとおり。（学務係）

修士課程　最終合格者数
総合分析情報学コース 7
博士課程　最終合格者数
社会情報学コース 8
文化・人間情報学コース 15
先端表現情報学コース (夏季一次合格者を含む) 6
総合分析情報学コース 1

Books

『日本美術全集 6　東アジアのなかの日本美術』
板倉 聖哲 編著 / 小学館 2015 年 2 月

『日本美術全集』全 20 巻の内の一冊。テーマ巻「東アジアのなかの日本美術」が対象とするのは日本に伝来した東アジアの美術。日本美術は古くから中国を中心とする東アジアの美術から多くの刺激を受けてきた。憧れであり、「古典」となった東アジアの美術を見つめ直し、影響を受けた日本の作品と比較することで、日本は何を受け入れ、何を変容させたのかを明らかにする。

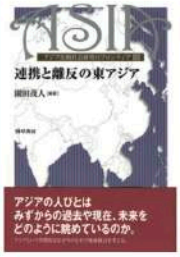
『統治の条件　－民主党に見る政権運営と党内統治』
前田 幸男・堤 英敬 著 / 千倉書房 2015 年 2 月

民主党が政権にあった 3 年 3 カ月を、野党時代からの連続性を念頭に、総合的に研究した学術書です。野党・民主党の研究から通算して 6 年近く続いたプロジェクトの最終報告であり、何故、民主党は政権を掌握しながら党としての意思統一が出来なかったのか、そして、自民党に代わって政権を担う政党に何が求められるのかを考察しています。日本の民主政治の今後を考える手がかりとして、広く読まれることを願っています。

『自閉症者の魂の軌跡
－東アジアの「余白」を生きる』
真鍋 祐子 著 / 青灯社 2014 年 12 月

自明視された規範や言説は、個の次元から家族や国家という集団次元にいたるまで、一人の魂を複合的に緊縛しその自由闊達な律動を妨げる。研究者も例外ではない。ゆえに、その言説が自他の魂を呪縛するようなことがあってはならない。叢書「魂の脱植民地化」は研究者自身による自己解体の物語だ。本書はその一冊として、「自閉症の現象学」を手掛かりに、構造と構造の「余白」を凝視する一朝鮮研究者の“今”が構成されるまでをたどる。

『連携と離反の東アジア』
園田 茂人 編著 / 勁草書房 2015 年 3 月



東洋文化研究所東洋学研究情報センターのプロジェクトと、文学部・人文社会系研究科・学際情報学府の授業を組みあわせることで実施可能になった、アジア学生調査第二波調査。同調査では、学生が主体的に質問票の設計から配布・回収、データ入力まで行ったが、これをもとに意欲的なアジア間比較を行った論文を収録したのが本書である。テーマは中国の台頭やアジアの地域統合、企業・留学指向の比較やソフトパワーの効果測定など幅広い。

『人と「機械」をつなぐデザイン』
佐倉 統 編 / 東京大学出版 2015 年 2 月

人が都市やソフトウェアといった人工物をも含む「機械」とこれまでどのような歴史を歩み、どのような未来を築くのか？－この問いにロボティクス、マンマシンインターフェース、プロダクトデザイン、イノベーション、哲学、心理学、人類学など実に様々な専門家が答えている。情報学環とオムロン株式会社のシンクタンクであるヒューマンルネッサンス研究所による共同研究会から生まれた、人と「機械」の未来を俯瞰する地図となる一冊。

TOPICS

着任教員紹介

板倉聖哲教授

東洋文化研究所では東アジア第2、美術研究室の所属ですが、この度、流動教員として情報学環に配属されました。専門は美術史学、研究対象は中国を中心とした東アジアの絵画です。中国の宋元画を対象とする作品研究を前提としながら、それらがどのように受容され、新たに絵画が生み出されていたかという視点から東アジア絵画史の再構築を目指しています。この機会に、イメージそれ自体だけでなく、屏風や軸などの形状や表装など、伝えるためのメディアに注目し、又、作品誕生の現場だけでなく、現在に伝えられるまでの過程、作品の居場所としてのコレクションや展覧会の意味について改めて考えたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。

倉田博史教授

総合文化研究科・教養学部から流動教員として文人コースに配属されました。流動は二度目で、前回は2007年から三年間こちらにお世話になりました。専門は数理統計学です。特に、統計的多変量解析の理論やそれに関連する非負行列の性質について調べています。具体的には、多次元確率分布のプリンシパル・ポイント、ユークリッド距離行列の諸性質、最適共変推定量、一般化最小2乗推定法などです。日頃、自分の研究を情報学に関連付けて捉えることは殆どないのですが、科研費の分類で「統計科学」が「情報学」の細目であることを見ますと、統計学と情報学の隔たりはそれほど大きくないようです。今回の学環出向を機会に情報学により近付きたいと思います。先生方との交流を楽しみにしております。

金子知適准教授

総合文化研究科より流動教員として着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。専門は、主にゲームを題材とした人工知能です。機械学習や分散並列探索などの基盤技術から、AIプレイヤによる個性の実現というような応用分野まで広く研究しています。特に将棋では、「GPS将棋」というオープンソースのプログラムをグループで開発し、第二回の電王戦というイベントでA級プロ棋士との対局も実現しました。研究の他には、ACM-ICPCという国際的なプログラミングコンテストに挑戦する学生を応援しています。基本的には修士一年まで参加できるので、興味のあるかたは調べてみてください。

三宅弘恵准教授

地震研究所より流動教員として参りました。学環では、学環・生産技術研究所・地震研究所の部局間連携として設立された総合防災情報研究センターに所属致します。専門は強震動地震学で、地震の揺れの予測や被害地震の分析を理学的な側面から行っています。学環に異動するにあたり、教員の先生方や事務の方々の明確な説明とスムーズな対応に感激しております。学生時代から大学の附置研に所属しておりましたので、学環に順応できるよう努力致します。また、学環の英語名称であるInterfaculty Initiative に込められた意味を日々考えながら、教育と研究に取り組みたいと思います。

河井大介助教

専門は情報行動論です。インターネットを中心としたメディアから人びとがどのような影響を受けるのかということに関心があります。特にマス・コミュニケーション的側面と対人コミュニケーション的側面を併せ持つソーシャル・メディアを中心としたインターネットの心理的・社会的な影響について研究しています。また、人びとのメディア利用の実態調査、いわゆるネット選挙解禁による投票行動への影響についての分析、広報効果に関する研究なども行っています。研究者としてのスタートを切ったところで、まだまだ至らないところもあるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

山岸前事務長退職

山岸正（前情報学環事務長）
平成27年3月31日定年退職

東京大学経済学部及び庶務部で勤務後、平成元年より大学入試センター及び国立天文台を各2回、徳山高専、島根大学を経て、平成20年4月に教養学部教務課長として東大に復帰。2013年4月より情報学環事務長に就任。学環での２年間は、ダイワユビキタス学術研究館の竣工のほか、教職員のトラブル等の対応に尽力された。「現在はＪＳＴ産学連携展開部企画課で勤務をしていますが、休日には無農薬野菜の栽培や高山植物を求めて山歩きを楽しみたい」とのことです。山岸事務長のご健康と益々のご活躍をお祈りいたします。

あとがき

新学環長のインタビューにもあるように、情報学環も創設以来 15 年が経過しました。伝統ができるとともに、油断しいるとだんだんと保守的に固まってしまうのも組織。常に新しいことに挑戦する気概を持ち続けたいものです。（暦本純一）

学環学府 45 5. 2015

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

編集委員：暦本純一・岡田美保・樋口啓太・中村裕美

mail：news@iii.u-tokyo.ac.jp / http://www.iii.u-tokyo.ac.jp